

■課題名：東アフリカの生業基幹作物バナナ (*Musa spp.*) とエンセーテ (*Ensete Ventricosum*) の遺伝資源をめぐる在来知の変容プロセス

■調査地：エチオピア共和国・南部諸民族州シダマゾーン・ハグレサラーム郡 K 村（標高約 2700m）

■名前：佐藤靖明

■研究目的：東アフリカ高地には、バナナとエンセーテという二つのバショウ科作物の栽培を生業基盤とする地域がそれぞれ広く分布している。それらの在来品種の多様性が維持されているしくみは、地域社会と作物の特性の相互的な関係として理解することができる。本課題の目的は、これらの二つの類似した作物をめぐる農耕について比較することをとおして、品種多様性をめぐる人びとの知識や作物への接し方の特徴が、作物・地域に固有なものなのか、より普遍的にみられるものなのかを浮き彫りにすることにある。ここで得られる知見は、作物遺伝資源をめぐる在来知を生成論的にみていくための足掛りになることが期待できる。

■研究内容と成果：

エチオピア・シダマ地域のエンセーテの農耕体系と品種の共有・交換形態に焦点をあてて 2008 年 2 月に現地調査をおこなった。その調査結果と、報告者が 2001 年からおこなってきたウガンダ・ブガンダ地域のバナナ農耕に関する研究結果をつきあわせて比較した。以下のことが明らかになった。

・シダマにおいて 17 世帯への聞き取りで言及されたエンセーテの品種は約 30 を数えた。人びとの品種識別のよりどころとなる外観的特徴は偽茎部分であることが多い。他方ブガンダにおけるバナナは、主に果実部分である。つまり両者とも、食用とする部位に関する細やかな認識がとくに発達していることがうかがえた。

・シダマのエンセーテとブガンダのバナナでは、苗の把握と管理の仕方が大きく異なっていた。シダマのエンセーテは、成長段階の低いうちは群として扱われ、移植を経て、個体として認識されていく。

・シダマのエンセーテの場合、苗の交換や販売が頻繁で、近隣から遠方まで多様なチャンネルを持つと考えられる。時期的に実際の交換の様子はみられなかったが、定期市や道端での販売や、高地から低地への販売がおこなわれるそうである。さらに、ある集落では苗を十数世帯で共有する活動が近年はじめられていた。ただし、その参加世帯は栽

培品種数が少ない傾向があった。それらに対してブガンダのバナナ農耕では、親しい二者間の苗のやりとりが主流であり、比較的シンプルである。

・シダマのエンセーテの場合、畑の経営年数と栽培品種数に相関がみられなかった。ブガンダでは、長年かけて品種が各世帯の畑に「蓄積」していく地域もあるが、それとは対照的である。

バナナとエンセーテの品種をめぐる管理・交換にかかわるこれらの特徴について暫定的にまとめたのが、下の比較表である。

	識別の 注目部位	個体／群 としての管理	苗の 交換	苗の 世帯間共有	ネットワーク
バナナ	偽茎	個体	○	×	シンプルでゆるやか
エン セーテ	果実	個体～群	◎	×～○	多様なチャンネル

■成果発表の具体的な予定

・本助成で得られた知見を含めた内容について、以下の口頭発表をおこなった。

Yasuaki Sato "The Multi-valued Setting of Banana-based Homegardens among the Baganda, Central Uganda" "International Workshop on Local Knowledge and Its Positive Practices", African Local Knowledge Research Group, Global COE Program of Kyoto University "In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa", Department of Sociology and Social Anthropology, Addis Ababa University and Center for African Area Studies, Kyoto University (Addis Ababa, Ethiopia, February 2008)

佐藤靖明「東アフリカ高地のバショウ科作物を中心とするホームガーデン：作物・地域間比較の視角から」『第46回日本アフリカ学会』（龍谷大学、2008年5月）

今後、『アフリカ研究』、*African Study Monographs* に投稿することを予定している。



写真１：エチオピア・シダマのエンセーテ畑



写真２：エンセーテの食用加工